



第二回  
エッセイ賞  
作品集

# 私と箸



一般社団法人  
國際箸學會®  
INTERNATIONAL INSTITUTE OF HASHI

第二回 二〇一六年度「私と箸」エッセイ賞

はじめに

国際箸学会は設立十周年を迎え、一般社団法人を設立、活動の一環として第二回目の「私と箸」エッセイ賞を募りました。

その結果、国内外より多数作品の応募を得て、次の通り受賞作品を決定いたしました。

大賞

ある箸職人さんとの出会い 玉井貴夫

優秀賞

無名兵士の箸 武富慈海

母の手元の思い出 高田勝

八角箸 本間由美

美しい箸使いは父の思い出 太田美樹子

私と箸 山口尚人

審査員特別賞（高校生の部）

私と箸 畑島杏果利

## 【受賞作】

※作品中、数字は漢数字に書き改めました。

### 大賞 ある箸職人さんとの出会い

玉井貴夫

八年ほど前、地元の百貨店で開催された匠の技を紹介するのれん市で、七十代とお見受けする職人さんが箸を売っていた。その職人さんが、水とこんにやくが入った汁椀を差し出し、この箸でこんにやくを持ち上げてみてくださいとおっしゃる。私はきつと滑り落ちるだろうと思いつつ、こんにやくの角をつまんだ。はたして、こんにやくは落ちることなく見事に箸につかまり、難なく持ち上がったのである。箸先に滑り止めのギザギザでも付いているのだろうと目を凝らすと、そのような物は見当たらない。見た目は「単なる竹の箸」である。そこで私は、「どんな秘密があるのですか？」と軽い気持ちで尋ねた。すると職人さんは涼しい顔で「これが箸だから。」とだけ答えたのだ。

私はその一言に強い衝撃を覚えた。箸に秘密があるのではなく、そもそも私の方が本当の箸を知らない、というわけだ。箸という、日常使う小さな道具を、生涯かけて作り続けてきたであろう職人さんの答えに、私は己の未熟さを感じた。そして、自分の仕事に自信を持って誇り高く売っている姿に感動し、ここのお箸を購入した。というより、分けていただいたと思っている。

職人さんの名前は知らない。お店の名前も思い出せない。お箸にブランド名が刻まれているわけでもない。しかしこのお箸は「単なる竹でできたモノ」ではなく、職人魂のこもった、私の生活に欠かせない道具である。独身時代に買って単身赴任先にも持って行った。君より長く付き合っている相棒なんだと語ると妻は笑う。

私は、三十代半ばを過ぎた今、器や靴など、日常の道具を作る方々に出会う旅に楽しみを覚えている。あの職人さんと出会ってから、品物を手に入れるときには、作り手や売り手の技や思いをできるだけ知りたい、そして道具と謙虚につきあい、心豊かな生活を送りたいと考えるようになった。

今朝もこのお箸を使って食事をした。ふとしたとき、「これが箸だから。」とだけ語ってくれた職人さんの涼しい顔を思い出す。

〔講評〕

○箸職人のひと言で、箸の深さを知り、職人魂を知ったというエピソードが読む人の記憶に残る優れたエッセイ。特に箸の秘密を聞いたときの「これが箸だから」という職人のひと言が文章を際立たせている。筆者の驚きが伝わってくる。何気ないひと言に反応する感性がすばらしい。ただし、後半で他の職人に言及する展開がひと言あり、結論に結びつくときさらによかった。

○箸のすばらしさを認識し、職人の話にも触れて、読み応えがあった。

○作者が使っている箸に、すごく興味がわきました。いったいどんな技によって物をつかみやすくなっているのか気になってしまいます。職人さんに対する尊敬が良く伝わってきましたが、「私と箸」のエッセイとしては、最後のまとめの部分にも箸の話題が一言入っているとさらによかったのかなと思いました。

○箸職人の匠の技・心意気が伝わる、すがすがしい一文。

## 優秀賞 無名兵士の箸

武富慈海

戦争資料館を開館して三十七年になる。日中戦争・太平洋戦争に従軍歴九年の亡父が戦争の反省と戦争を知らない次世代に戦争の真実を伝えることを目的として、一九七九年七月に自宅を改造して『兵士・庶民の戦争資料館』を開館。日本で初めての私設資料館である。年中無休、入館無料、「手に触れて下さい」の方針を父は開館当初から亡くなる日まで貫いた。

十四年前に父は急逝。母が二代目館長として今日まで資料館を維持・運営している。私は副館長として九十歳の母を支えている。

資料館は常設展示の実物資料が二百点ある。ガラスケースの片隅に木製の箸一膳と箸箱が展示されている。その横に『空しかれどスプーンを作り箸を削り思い思い満たせど飢えは満たせず』と書かれた短歌が添えられている。私は父が存命中にこの箸と箸箱そして短歌の由来を聞いていた。

太平洋戦争のニューギニア戦線に従軍した兵士が現地で作った遺品で、その出来栄えからおそらく軍隊に入営前の職業は指物師であろうと父は話していた。制空権、制海権を連合軍に握られ補給ルートが断たれたニューギニアには食べ物なかった。「いつも箸の立つご飯を食いたい」が兵士たちの願いであった。生きるか死ぬかの極限状況の中で、現地の木で箸と箸箱を幾日もかけて作った兵士の思いを慮ると胸が痛くなる。

土に伏し草に仰向き、背負子に引き倒されて死せるが如きあり、或いは椰子喰はんとしてコプラの腐えたるを握りしまま、或いは水飲まんとして水辺にねじれて倒る。悉くこれ傷ましくも尊き餓死の姿なり。(工藤政男ニューギニア戦詩の一節)

ガダルカナル、ニューギニア、レイテいずれの戦場も餓死による兵士の遺体が累々と散乱し数知れぬ蛆の餌食となり、白骨をさらす身になり果てた。非情で悲惨な戦争の実相であった。白骨となった遺骨は異郷の地で今なお百万柱ちか

くが眠ったままである。

近現代史専攻の学者の研究によれば、日本軍将兵の戦死者・戦病死者数二四〇万三千人のうち七〇パーセントが餓死であった。

極限状況の戦場においても箸食の作法を忘れず、飢えと戦って死んだ兵士がいたことは日本人として誇りであり、来館者にいつまでも語り伝えていこうと思っている。

#### 〔講評〕

○食べることの原点と、戦時中の無名兵士の無念さを教えてくれる好エッセイである。「箸が立つご飯を食べたい」という切なる願いから極限の中で箸と箸箱を作った兵士の思いが伝わってくる。惜しむらくは、箸や短歌が資料館に収められた経緯、亡きお父上の思い、あるいは来館者の箸や箸箱に対する感想などがあると、さらに内容の豊かなエッセイになったと思う。

○戦時中の悲惨さが、箸を通してよくわかるが、箸そのものの話がほしかった。

○忘れてはならない貴重な話を取り上げたことは非常に価値がある。

○飢餓の中、箸を削った兵士の方を思うと、作者同様に胸が痛くなりました。「こんな思いで作られた箸があるんだ」ということを教えてくれる貴重なエッセイだと思います。この箸や、箸を作った方にもっと焦点を絞って書かれたら、もっと良くなるのではないかと思います。

○戦地で箸と箸箱を作成していた方がいらしたとは。食に対しての熱い思いに感動した。

## 優秀賞 母の手元の思い出

高田勝

三十年以上前になるが、長女が四歳の頃、夕飯を囲みながら彼女の手元を見ると、箸の持ち方が変であった。なんと、私の持ち方と同じなのだ。中指と薬指それぞれの指先の腹に箸を置き、中指側を動かしてつかんでいる。

当時、テレビドラマの中で、女優さんが変な持ち方をしているのを見たので、娘の手元が気になってしまったのだ。自分のことは棚に上げておいて、何とも失礼な話だが。

食事のとき、妻は娘の横に座って世話を焼いている。娘の目には、向かい側に座って食べている私の手元がよく見えたのだろう。私のほうは、そんなに真剣に見られていたとは、露ほども感じなかったが、子供の観察力はすごいものだ。

そこで、「さっちゃん、箸の持ち方がお父さんと同じだけど、これ、お父さんの間違いなんだ。競争して直そうか」と言うのと、「いいよ」と言うことで、二人の競争が始まった。

それからわずか二週間程で彼女は完璧に直し、私は三ヶ月以上かかって、ようやく直すことができた。その間、「お父さん、まだできないの」と言う娘の得意そうな言い方を今でもよく覚えている。

それからしばらくして、実家で父母らと食事をしていたとき、啞然としてしまった。ふと母の手元を見ると、まさに私が持っていた箸の持ち方なのだ。娘の持ち方を見るまで気にも留めなかったが、私のそれは母の持ち方だった。

当時母は、もう六十歳を過ぎていたので、今更直す気もないだろうし、豆や豆腐といったものもつかめるのだから、支障も無いだろう。あえて私から言うこともしなかった。

今、九十四歳になる母は、相変わらずあの持ち方だが、器用に好きな煮豆をつかんで食べている。

娘の子供たち、つまり私の孫たちだが、二人の女の子は、とても綺麗な箸の持ち方をしている。

最近では、エジソンの箸というものがあって、二〜三歳からこれを使って、正しい箸の持ち方を習得したのだそうだ。

便利な世の中だが、少なくとも、親の手元を見て箸の持ち方を覚えるという人間の能力は、退化してしまうだろう。

悪癖は、付けないほうが良いが、直すのなら、エジソンよりも親子の競争のほうが楽しいと思うのは、時代遅れだろうか。

母の持ち方を見て私が覚え、それを娘が見て覚えたあの箸の持ち方は、正しい形ではなかったが、家族の繋がりを感じさせる出来事であった。

#### 〔講評〕

○箸の持ち方が親子代々伝わっていたことを小さな娘に教えられたという展開と、箸の持ち方を娘と競争して直したというエピソードがほほえましい好エッセイ。母親がどうしてそういう持ち方になったのか、もう一步踏み込んで聞いていたら、さらにすばらしい内容になったと思う。

○家族内の出来事や経緯がよく表現されているが、やや分かりにくい展開。

○自分にも身に覚えのある話であり、楽しく読ませていただきました。箸の持ち方から、家族のつながりへと転じる流れも自然で、とても良くまとまったエッセイだと思います。余談ですが箸の持ち方を言葉で表すのは難しいなあと感じました。

○箸使いを通じて、親子の情愛が滲み出る印象に残る作品。

○まさしく子供は何でも真似から始まります。



## 優秀賞 八角箸

本間由美

主人はとても不器用だ。靴の紐を結ぶのも、シャツのボタンを留めるのも時間がかかる。まあ、それは個人的な事なので我慢もできるが、食事中に料理をぼろぼろと落とすのには参ってしまう。ましてや醤油をつけた刺身などを白い服に落とした時などはひと騒動だ。醤油の染みが残っては大変なので、すぐに服を脱がせて洗剤などで洗わなければいけない。落ち着いて食事もできないのである。まったくのところ、子供より手間のかかる主人であった。

そんな主人が、ある旅館に宿泊した際「この箸、使いやすいな。料理がぴたつと吸い付くようにつかめる」と言ったのだ。

(どうしてだろう)

私は自分が手にした箸を見てみた。それは八角形をした箸だった。旅館の仲居さんにその箸のことを尋ねてみると、その形の通り「八角箸」という種類の箸だと教えてくれた。それから、この箸はどんなものでも簡単につかめるということも付け加えて教えてくれた。

試しに豆やこんにやくなどをつかんでみると、お茶の子さいさいという感じで簡単につかめた。不器用な主人でさえ、得意げに豆をつかんでいた。

(これは買うしかない！)

自宅に戻った私は、早速インターネットで八角箸のことを調べてみた。正直なところ、安くはなかった。とはいっても値段はぴんきりで、三千円くらいのものから三万円くらいのものであった。

(一番安いのでいいか)

そうも思ったが、少しばかり奮発することにして八千円ほどの八角箸を購入した。

さて、現物が届けられ、主人に使わせてみると――。何とも見事に料理をつかんでいくではないか。本当に優れも

のだった。これで私もゆつくりと食事ができるようになったのだから、八千円の箸も安い買い物であった。

そんな主人が最近、八角箸をもう一膳欲しいと言ってきたのだ。「どうして？」と尋ねると、「外用で使いたい」との返事が返ってきた。確かにワイシャツやネクタイには頻繁に食べ物の染みがついている。クリーニング代を考えると安い買い物かもしれない。だけど八角箸は高価な品だ。しばし考えてから「誕生日プレゼントで買ってあげる」と言い伝えた。主人は少し不満な顔だったが、私は内心で満面の笑みを浮かべていた。

何と言っても、クリーニング代が減り、誕生日プレゼントに何を買うのか悩まずに済んだのだから……。まったくもって一石二鳥であった。

#### 〔講評〕

○夫婦の情愛が箸を通じて描かれている好エッセイ。食事中の風景が目に浮かぶようで、思わず笑みがこぼれる。誕生日プレゼントに二本目の八角箸を買ってあげるといふオチも効いている。

○八角箸のすばらしさを認識した話はよかった。周辺に広げてほしい。

○とてもわかりやすい文章で、旦那さんの様子や八角箸の魅力がよく伝わってきました。旦那さんに対して厳しい言い方をしていますが、実はとてもよく世話をやいている。厳しい物言いがこのエッセイの面白さではありますが、隠れた愛情がもう少し表に出てくると、さらに味のあるエッセイになったのかなと思います。

○事象だけではなく、箸への思いをもっと書き込んでほしい。

## 優秀賞 美しい箸使いは父の思い出

太田美樹子

五十六年前、私が小学六年の時に、四十九才で亡くなった父は、私が箸で食事をしはじめた頃、『ミキコ、箸はな、こうやって使うんだよ』と、箸の持ち方を、やさしくていいねに、ゆつくりと、時間をかけて、食事の度に教えてくれました。

なかなか上手に使えない私を、一度もしかる事なく、ちょっとでも上手に使えると、『そうそう上手!!上手!!』と、まるで天下を取ったようにほめてくれました。

父のこの言葉は、幼なかつたけど今でも覚えています。『ミキコ、女の子はな、箸をきれいに使うだけで美人なんだよ』と言ってもらった事も。

そして、私には三人の姉がいて、私がそれなりに箸を使えるようになった時、改めて姉達の箸の使い方意識して見た時、父が教えてくれた通りに、きれいに使っている事がわかり、そうか、姉達も、私と同じように、父に教えてもらったのだと悟ったものです。

そんな私を見て三人の姉達が、口を揃えて『そうよ、ほら、きれいでしょ』と、箸をひとさし指と、まん中指ではさんで、美しく動かすのを見て、感動したものです。

そして月日が流れ、私は三人の娘の母になり、三人の娘達に、父と同じように箸の使い方を、そして思い入れを伝授しました。

そして、その三人の娘達が成人し、それぞれの職場や嫁ぎ先で、箸の使い方が美しいね、と言われ、とてもうれしかったと聞いた時、父の事を思いました。

父はきつと、天国で喜んでくれているだろうな・・・と。

親から子へ、子から孫へ、美しい箸さばきを、日本の美を伝えていく事の素晴らしさをしみじみ感じたものです。

〔講評〕

○父娘の情愛を感じさせてくれるエッセイ。褒めることで箸づかいが上達した筆者が三人の姉を見て、さらに父の教育上手を知り、その教えを娘たちに引き継ぐという心温まる話だ。もう一つぐらい父親とのエピソードがあるとよかったと思う。

○すばらしい箸教育で、健やかに育っているのはすばらしい。各家庭で学びたい。

○お父さんとのやりとりがとても微笑ましく、心温まるエッセイだと思います。お父さんの思いが、お姉さんたちや娘さんへとつながっているのがよくわかりました。

○父の思いが世代を超えて伝わる。まさに箸は橋渡し。

今から四十五年前の高校一年の時だった。男子クラスメートが二時限目の授業が終わった時、私に話しかけ

「お前の弁当売ってくれんね。三百円でよかね。」

と言うと私に三百円を渡した。

当時、私の高校には学食があり、三百円でカレーを食べることができた。私は『今日はカレーでいいか。』と内心つぶやきクラスメートに弁当を渡した。するとクラスメートは手に取るやいなや、弁当を空け食べ始めたのだ。いわゆる早弁である。休み時間の間にクラスメートは弁当を食べつくすと、

「お前のお母さんの玉子焼きの味は絶品やね。」

と言って箸を箸入れに無雑作に入れた。弁当箱には米つぶが残っていた。

実を言うと私の弁当は人気がありよく売れるのだった。クラスメートのうわさでは玉子焼きが特に旨いとの評判で、あるときは三百円から五百円に値が上がる時もあった。皆からそう言われるのは嬉しかったが、箸を作られるのは嫌だった。

ある日母に言った。

「お母さんの玉子焼きはクラスで評判が良く、俺の弁当が食べたいと言われるとよ。」

と母を喜ばせるつもりで言ったのだが母は、

「何であんたの弁当の味を他の生徒が知つとると。」

と少し怒りを込めたニュアンスで言った。

「たまに売ったりしたことがあるけん。」

「どつりでたまにごはん粒がいつぱいと思つた。箸も貸しとるとね。あの箸はあんたの為だけに使うよう買った

とよ。口に入れるものを人に貸すなんて。汚かやる。もう作ってやらん。」

と怒られてしまった。心の中で『一応箸は貸したくなかったんだ』と呟いたが母には言えなかった。

弁当の中身もだが箸にも親の愛情があったのかと今でも反省している私である。

〔講評〕

○誰しも母の思い出の接点にあるだろう弁当に関する秀逸なエッセイだ。母の作ってくれた弁当を友達に売っていた筆者が思わず、母の箸に対する思いも知るといふ展開がすばらしい。母親と筆者の箸にまつわる後日談があれば、さらに引き締まった良いエッセイになった。

○箸の話よりお弁当の話が中心。もっとお母さんのこだわりが欲しかった。

○面白いエピソード、長崎弁(?)のテンポの良い会話。それだけに、箸か弁当か、焦点がぼやけてしまったのが残念です。

○青春の一コマと箸と母への思いが生き生きと綴られている。

○日本ならではの自分用の箸の話。お母さんはなんとも言えない気持ちだったのでは。

## 審査員特別賞（高校生の部） 私と箸

畑島杏果利

高校の入学式の時の話です。

「これが自分用の箸……」

私は高校に入学する前、受験高のホームページやパンフレットに『箸の持ち方』などと書いてあったので、驚きました。早速豆を買い、箸の練習を始めました。食べる時も気を使いました。そして、試験日が来ました。私は、手が疲れほど練習し、その結果合格しました。久田学園の入学式の時、校長先生が「入学のお祝いに、箸のプレゼントをします。」と言われ、びっくりしました。

箸を手渡された時、何故か箸が光っている様に見えました。私は嬉しさと驚きのあまり、最初に書いた一言が口から思わず出ました。

私は「よしっ。これから、一生使い続ける。」と心に誓いました。

私は、箸をいただいた瞬間に運命を感じた事を今でも覚えています。そして、箸を使う度に思います。

「死ぬほど練習して良かった。」と。

箸を上手に持つと、食事や食べる姿もきれいに見えます。だから、ずっとずっと『箸美人』を続けたいと思います。

「箸」は喋りませんが、色々と私に学ばせたり教えてくれたりします。だから、私はいただいた自分の箸といつも向き合い、たとえ箸がホロボロになったとしても、一生懸命使った証だと思い、この箸を大事にしていきます。

〔講評〕

○高校入学を機に、箸や箸づかいの重要性を知った筆者の思いがよく伝わってくる。箸がいろいろなことを教えてくれるという感性をずっと大切にしてほしい。

○文章の展開は今ひとつだが、箸への気持ちがよく表れている。

○箸をもらった時のうれしさや、頑張つてよかったという気持ちがよく伝わってきました。若者らしい、素直で心のもったエッセイでした。

○気負わずに、素直な言葉で書けばもっといい文になると思う。

○入試に箸の持ち方を取り入れているとは最高です。日本の学校すべてにお願いしたいくらいです。



一般社団法人

国際箸学会

二〇一七年一月三十一日 発行

郵便番号 三三三-〇〇三三

住所 川口市並木元町七-二五

電話 〇四八-二五〇-四一八四

本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気  
または光媒体への記録等を禁ずる。